

—挨拶

岩田：如何でしたでしょうか。ベニシアさんもこのDVDでミツバチは私たちに食糧をもたらしてくれている大切なものとおっしゃってますが、ミツバチと私たちの生命とどの様な関係性が有るのか知りたいですね。

今から少し時間を頂きまして、そのミツバチに詳しい小織さん、さおりさん女性じゃないです。

小織健央さんにご登場頂きます。

—図表①

—拍手

正真正銘、男性ですが、名字を小織と言われます。宜しくお願い致します。

今は庭園管理士、植木屋さんをされています。現在お仕事傍ら、滋賀の小さいカフェなどで「ミツバチからのメッセージ」という映画の上映会をされ、ミツバチを通じた環境問題の勉強会をされています。ミツバチの事に色々お詳しいのですが、いつ頃からミツバチさんにお近づきになられたのですか？

小織：ミツバチを自分の庭で飼おうと思い立ちまして、それが4年ほど前のことなんです。どうしてミツバチか？ということは何ですね。子供の頃から昆虫が大好きでして、昆虫図鑑を丸ごと暗記するぐらいだったんですね。

ま、でも、今ではもう昨日の晩ご飯も思い出せないぐらいなんですけど・・・。

で、昆虫採集をしては、いろんな虫を飼っていたんですけど、いつか、そのうちミツバチを飼って美味しいハチミツを頂ければなと思っていました。

岩田：小織さん、ご出身は？

小織：出身は京都なんです。生まれ育ったのは金閣寺の近くで、今では想像できないくらい自然豊かな環境でした。菜の花畑や原っぱ、空き地なんかでよく遊んでいました。とにかく「原っぱ」というのがたくさんありました。

それから、もうずいぶん長い年月が経ってしまったんですが、その頃の原風景を求めまして、13年前に高島市に移住してきました。最初は今津に9年、そしてマキノ町に引っ越しまして、ここならミツバチが飼えそうだなと思ったんです。

それで、ミツバチについて、いろいろと調べているうちに、大変なことが起こっているって分かってきたんです。

岩田：米原でミツバチの巣箱が盗まれたという事件があったそうですが、巣箱を盗む人があ
るんですね？刺されるかもしれないのに,,,

小織：そうですね。去年の11月のことで、ご存知の方も多いかと思うんですけど、約100万匹のミツバチが盗まれたそうなんです。養蜂場の巣箱なんですけど、20箱だそう
です。

つまり、この事件が何を意味するかというと、それぐらい、盗んででも手に入れたい
ほど、ミツバチが不足しているということなんです。

養蜂場の巣箱というのは、もちろんハチミツを採るためのものもありますが、農家さんに貸し出して農作物の受粉に使われるんです。

岩田：蜜を取るときに羽や体に花粉をつけるのですね。

小織：はい。イチゴ、メロン、サクランボなどは、ミツバチがいないと手作業で受粉させないといけない場合もありますので、農家さんにとっては大変な負担になります。負担が増えるということは、コストが上がるということですし、またミツバチが不足すると、もちろんミツバチの価格も上がります。

一 図表②

農協さんなどにミツバチを供給している最大手の会社がですね。「業界が消滅するほど」と危機感を募らせているほど、ミツバチの不足は深刻になっています。

今、世界中でミツバチの大量失踪、あるいは大量死という現象が報告されているんですが、日本も例外ではありません。どこか遠い国の出来事というわけでもなく、私たちのすぐ身近なところで起きている問題で、他人ごとではないということです。

② 説明

岩田：私はブルーベリーを栽培して 30 年ですがブルーベリーの花はスズランの様に筒状になっているのでハチ達が受粉をしてくれて実がなるのです。以前は 5 月の開花時にはハチの羽音がブーンとする程来てくれていたのですが、そういえば最近は蝶々の数もアッ蝶々!!と思うほど少なくなった様に思うのですが、何が原因でしょうか？

小織：何が原因かについてはですね、諸説あります。

ダニやウィルスによる病気、電磁波の影響、気候の変化、それから、働き過ぎによる過労死というのもあります・・・。

ですが、近年主な原因として考えられているのが「ネオニコチノイド系農薬」というものです。

「ネオニコチノイド」の「ネオ」というのは、「新しい」という意味で、「ニコチノイド」というのは、ニコチンを原料にした有機化合物のことです。

この農薬は 1990 年代以降に使われ始めまして、害虫だけを殺す「夢の農薬」として急激に使用量が増えています。

一 図表③

ミツバチと、この農薬の因果関係というものは、まだ科学的にはデータとして実証されていないということで、広く使われているんですが、実は使用上の注意書きには、こんなことが書かれています。③ 説明

岩田：ミツバチに対して非常に影響があるということですね。

小織：ええ、それでですね。EU では、昨年 5 月に、この農薬の使用を規制することを決定しました。

2 年間の期間限定ですけれど、3 種類のネオニコ系農薬を使用禁止にしました。

岩田：ネオニコチノイド系の農薬のことを先日ベニシアさんとお話ししていた時に、イギリスではすぐに使用禁止になったのに日本は何故使えるようにするんだろう？とおっしゃっていましたが、日本ってそんなに農薬を使っているのでしょうか？

一 図表④

小織：はい、日本は実はですね。「単位面積当たりの農薬使用量」というのがありまして、これが、つい最近の 2006 年までは世界一でした。その後は、韓国、中国に首位の座を譲ったんですけど。

④説明→図表⑤、説明

岩田：私も自分でブルーベリーを栽培するまでは、一般の農家さんが多くの農薬を撒いていることを知りませんでした。日本のブルーベリーは結構沢山見ているのですが、その中のある農家さんが農薬を撒いて倒れたと笑いながら話されているのを聞いて本当にびっくりしました。

しかし、今減農薬など時代は少しずつ農薬の使用等を控えるようになってきていると思うのですがいかがでしょうか？

小織：はい。確かに私のところの身近な農家さんでも、自然農法や有機農法を取り入れた野菜やお米の栽培をされている方が増えてきている印象です。しかし、まだまだそれでも日本の農薬使用量は全体として多いですね。

一 図表⑥

それから、「残留農薬基準値」というのがありまして、これが大変おそろしいのですが、それぞれの作物ごとに厚生労働省が定めた基準値があります。これがどんなものかといいますと、「これぐらいは農薬が残っていても直ちに健康に害はない」という基準で、この基準が EU やアメリカと比べて、大変ゆるいものになっているんですね。

⑥説明→図表⑦、説明

岩田：えらい日本は緩いんですね。農薬にも色々種類があると思うのですが、何故このネオニコチノイド系の農薬に変えていってるのでしょうか？

一 図表⑧

小織：この農薬の特徴は、大きく 3 つありまして、浸透性があるということ、残効性が長いということ、そして、神経毒性があるということ、です。

この特徴を利点から見ますと、

浸透性があるということは、農薬を散布した後に例えば直ぐに雨が降っても、流れ落ちてしまわないで、効き目が持続するということです。

残効性が長いということは、散布する回数を減らせるので作業の手間が省けるということになります。

神経毒性があるというのは、これは昆虫の神経にだけ作用して殺すことができるので、人間には害がありませんよということなんです。

岩田：とっても怖いように思いますよね。

小織：はい、そうなんです。このことを逆に考えてみますと、

浸透性があるということは、洗っても落ちないということなんです。

そして、残効性が長いということは、収穫した作物を食べる時にも農薬が残留しているかもしれないということなんです。

神経毒性については、農薬メーカーは人間に害はありませんと言っていますが、昆虫の神経と人間の神経は基本的に同じ構造だという学説もありまして、その毒性は近年明らかになってきています。

岩田：これってミツバチが大量死するってことは私たち人間にもどんな影響が考えられますか？

一 図表⑨

小織：はい、かの有名なアインシュタインが、このようなことを言っています。⑨説明で、今現在どれくらいミツバチが減っているかというとですね。

一 図表⑩

大変ショッキングなデータですが、国や地域によって異なりますけれど、全体の50%から90%までもが消滅したとも言われています。

⑩説明→図表⑪、説明

岩田：そんなに近い将来なんですか！

小織：はい、そして、先ほども申しましたようにですね、昆虫の神経と人間の神経は基本的に同じということですので、大変危惧されていますのが、子どもの脳に対する影響です。

子どもの脳というのは、まだ発達が十分でない時期には、外からの有害な化学物質を防御する力が備わっていないそうです。ですので、当然大人よりも農薬の影響を大きく受けてしまいます。

岩田：直接的な人体の影響も心配ですし、花の蜜を吸い受粉の働きをしてくれるミツバチがいなくなってしまうことも大変な問題だと思います。私達や周りの生き物が健康に生活をし、農作物からの多くの実りを頂ける暮らしを続けて行く為に、私たち一人一人に出来る事がありますか？

小織：それはですね。今日、このミツバチの話聞いて、興味関心を持たれた方は、ぜひご自身で、「自分にできることは何だろうか？」ということを考えてみて頂きたいんです。

「どうして日本は、こんなにたくさん農薬を使うんだろう？」

「なぜ、日本の残留農薬基準値は他の外国より緩いんだろう？」ということ、考えてみて、そのことについて少し調べてみますと、きっと「自分がしなければならないこと」そして、「自分にできること」が見えてくると思うんですね。

「このままミツバチが減っていくと、自分や家族の生活は、どう変わっていくんだろう？」ということ想像して頂ければ、きっと、その答えは探し出せるはずです。

一人一人ができることって、小さなことしかできないんですけど、これを皆でやっていけば、大きな力になると思います。

その小さなことの積み重ねで、社会を変えていくことができるのではないのでしょうか。

一図表⑫

滋賀県では、皆さんご存知のように、かつて「石けん運動」という住民運動が盛り上がりを見せました。

琵琶湖の環境を守るために、女性が中心となって大きな力を発揮したんですね。

岩田：そうですね。1977年いまから37年前のことです。琵琶湖に赤潮が発生し、その原因の1つが合成洗剤に含まれるリンだという事がわかり、女性たちの団体等が中心となり合成洗剤の使用をやめ、粉石けんに変えることを勧めました。その結果粉石けんの使用が約70%にまで達したと言われていています。女性にある命を守ろうという危機管理能力がその運動を立ち上がらせたのでしょうか。

小織：（ちょっと画像があまり鮮明ではありませんが）この方、普通の主婦の方だと思うんですけど、こんなふうに「合成洗剤追放」と書いたタスキをかけて、運動されていますね。私も1年前は、ただの植木屋でしたが、エイと思い立って、今こうして、こんなに沢山の皆さんの前でお話をしています。

今、田んぼや畑で散布される農薬は、すべて水に溶けて琵琶湖へ注がれていきます。大切な琵琶湖を守るため、そして、そこにいる多くの生き物を守るため、また、次の時代を担う子ども達の未来のために、皆さんも勇気を出して一歩前に進んでいただきたいと思います。自分にできることから始めていきましょう。どうぞ、よろしくお願い致します。ありがとうございました。

一図表⑬

岩田：どうも有難うございました。私の facebook にある人が投稿してくれた画像にミツバチがいる時、ミツバチがいない時の食糧、野菜、果物が満たされているのと全くない、そんな画像がアップされていました。

このことは、誰か他の人の問題ではなく、私たち自身の問題だと思います。

このミツバチのことに関する勉強会が、またこの会の後日に開かれます。

その会はどのようなものかご説明頂けますか？

一図表⑭

小織：本日のプログラムと一緒にお配りしました「こいのぼり大作戦！」というチラシをご覧ください。

「ミツバチからのメッセージ」上映と講演会を5月25日の日曜、午後成安造形大学で開催いたします。

ミツバチについてのドキュメンタリーのDVD上映と、東京から専門の先生を3名お招きしまして、講演をしていただきますので、皆様のご参加をお待ちしております。

岩田：ありがとうございました。みんなで手を繋いで1450万人の水瓶琵琶湖を抱くこの滋賀から生命のメッセージを発して行きたいと思います。

それでは休憩をはさんで皆様お待ち兼ねのベニシア・スタンリー・スミスさんのお話しを伺う事と致します。